

『事に当たっては、考え抜いて ～ 持つパワーを十分に発揮する ～』

2023 年 2 月 20 日福島県石川郡浅川町にある【吉田富三記念館】から『没後 50 周年・生誕 120 周年記念誌 吉田富三 (1903-1973) 』（浅川町吉田富三顕彰会 発行 発行日 2023 年 2 月 10 日）が送られて来た(画像 1-3)。筆者の『吉田富三博士を偲ぶ』も文章も掲載されていた。ただただ感謝である。早速、拝読された方から『昨日、没後 50 周年・生誕 120 周年記念誌が手元に届きました。中に樋野先生のご執筆”吉田富三博士を偲ぶ”がございます。宜しければ Facebook にアップ致したく存じますが、如何でしょうか。』との心温まる連絡を頂いた。2003 年に『吉田富三生誕 100 周年記念事業』（画像 4）が、2009 年には吉田富三博士を生んだ福島県の福島県立医科大学で『吉田富三記念福島がん哲学外来』が開設された。『吉田富三記念福島がん哲学外来』の『モットー 5 か条』（画像 5）が謳われている。医療に関わる人材育成の現場においても『吉田富三博士没後 50 年・生誕 120 周年記念事業の全国展開』は時代的要請ではなかろうか！

【吉田富三博士は、『自分のオリジナルで流行をつくれ』で、1) 顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家 2) 顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた『哲学』 3) 『がん細胞で起こることは人間社会でも起こる』、『事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを十分に発揮して大きな仕事をされた。』】と癌研究会癌研究所時代の恩師：菅野晴夫 (1925-2016) 先生から教わったものである。筆者は、吉田富三博士との間接的な出会から必然的に『がん哲学＝生物学の法則＋人間学の法則』の提唱へと導かれた。『病理学』は【顕微鏡を覗きながら、大局観を持つことが求められる分野でもある。『森を見て木の皮まで見る』ことであり、マクロからミクロまでの手順を踏んだ『丁寧な大局観』を獲得する『厳粛な訓練』の場】でもある。

【『医師は生涯書生』・『医師は社会の優越者ではない』・『医業には自己犠牲が伴う』】（吉田富三）は、まさに、現代にも生きる『医師の 3ヶ条』である。さらに、吉田富三の【医師が患者という人間をみる『眼』の問題は、近代医学教育と、医師の修練過程のどの部分で、どれだけ重視されているのか。そこを考えると、疑問なきを得ない。】（1967年）は、今にも当てはまる指摘である。

没後50周年・生誕120周年記念誌

# 吉田富三



一般財団法人浅川町吉田富三顕彰会

# 吉田富三博士を偲ぶ

順天堂大学名誉教授

樋野興夫

福島県石川郡浅川町にある【吉田富三記念館】から、『この度、吉田富三（一九〇三—一九七三）博士没後五十年・生誕百二十年記念事業としまして記念誌の発刊を計画しております。』との連絡があり、『記念誌への執筆』の依頼を受けた。【吉田富三博士は、『自分のオリジナルで流行をつくれ』で、一 顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家 二 顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた『哲学』 三 「がん細胞で起こることは人間社会でも起こる」Ⅱ『がん哲学』、「事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを充分に發揮して大きな仕事をされた」】と癌研究会癌研究所時代の恩師・菅野晴夫（一九二五—二〇一六）先生から学んだものである。

私は、医師になり、癌研究会癌研

究所の病理部に入った。当時の所長であった菅野晴夫先生は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本の誇る病理学者・吉田富三博士との出会いに繋がった。吉田富三博士は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、二〇〇三年、『吉田富三生誕百周年記念事業』を行う機会が与えられた。吉田富三博士の論文、著作を熟読し、これを機に、吉田富三博士への関心が高まり、深く学んでいくことになった。こうして南原繁、吉田富三博士との出会いから必然的に『がん哲学』の提唱へと導かれた。さらに、「陣営の外Ⅱがん哲学外来」へと展開した。不思議な時の流れを痛感する日々である。『がん哲学』

とは、南原繁の政治哲学と、元癌研究所長で東大教授であった吉田富三博士のがん学をドッキングさせたもので、『がん哲学Ⅱ生物学の法則＋人間学の法則』である。『がん哲学外来』は、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする病理学者の出会いの場でもある。私が『がん哲学外来』で語るのとは、これまで学んできた先達の言葉である。まさに『言葉の処方箋』である。

二〇〇三年の『吉田富三生誕百周年記念事業』が、吉田富三博士を生んだ福島県の福島県立医科大学で、二〇〇九年『吉田富三記念福島がん哲学外来』が開設され、二〇一二年九月十六日には『吉田富三記念福島がん哲学外来』開設三周年記念

市民公開シンポが企画された。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。吉田富三博士の偉業は「がんをつくる」学問歴の上にある。がんは、遺伝子の異常によって細胞が、がん化することから起こる。その遺伝子の異常の原因には、化学的因子、物理的因子、ウイルス、がん遺伝子の問題、その他の因子がある。しかし、長い間、がんがなぜ発生するかは謎で、そこで、いかに「がんをつくる」かが、大きな研究テーマだったわけである。「がんをつくる」、その起源は一七七五年、イギリスの外科医、ポットの報告に始まる。ポットは煙突掃除夫の陰のうがいを報告したが、それを引き継ぐのは「病理学の父」と呼ばれるドイツの病理学者ウイルヒョウ（一八二一—一九〇二）である。ウイルヒョウは「刺激説」を提唱し、

何らかの刺激を受け続けるとがんが発生するだろうという説である（形成的刺激）。これを証明したのが、ウィルヒョウの下で刺激説を学んだ山極勝三郎（一八六三—一九三〇）である。彼は実験用のウサギの耳にコールタールを塗り、一九一五年、世界で初めて「扁平上皮がん」というがんを発生させることに成功した。「日本病理学の父」と呼ばれる山極勝三郎の研究によって日本は化学発がん、環境発がんの創始国として、世界の発がん研究をリードする国になったのである。

そして山極勝三郎に続く人物が吉田富三博士である。吉田富三博士は、化学物質（アゾ色素）をラットに与え、世界で始めて内臓がん（肝がん）を発生させた。一九三二年のことである。さらにその後、アゾ色素を与える実験を続け、ラットの腹水に肉腫を発見した。肉腫は「長崎系腹水肉腫」と命名されるが、後に「吉田肉腫」と改名される。「吉田肉腫」の発見（一九四三年）は戦争中のことである。戦後、この肉腫の株が世界中に分けられて、発がん研究に大きく寄与した。そこで「吉田肉腫」の発見は、現代のがん研究の基礎を築いたといわれている所以である。吉田富三博士は病理学という専門分野を極

め、さらにまた、医療制度や国語政策にも取り組み、重要な提言を行っている。吉田富三博士は、「人体の中で起こっていることは、社会と連動している」といい「がん細胞に起こることは必ず人間社会にも起こる」といつている。ここに、『がん哲学』の源流がある。

「医師は生涯書生」・「医師は社会の優越者ではない」・「医業には自己犠牲が伴う」（吉田富三：一九〇三—一九七三）は、まさに、現代にも生きる「医師の三ヶ条」であろう。さらに、「医師が患者という人間をみる『眼』の問題は、近代医学教育と、医師の修練過程のどの部分で、どれだけ重視されているのか。そこを考えると、疑問なきを得ない。」（一九六七年）と指摘しています。

病理学は顕微鏡を覗きながら、大局観を持つことが求められる分野でもある。科学としての「がん学」を極めることは、「森を見て木の皮まで見る」ことであり、マクロからミクロまでの手順を踏んだ「丁寧な大局観」を獲得する「厳肅な訓練」の場でもある。「陣営の外」で日々気づかされ、勉強である。これが「時代の徴」の学び方でもあろうか。まさに「風貌を見て、心まで診る」病理学」の時代的到來であろう。「病理

学」理論的根底」の懐の深さを感じずる。ここに、「病理学の健全性」を感じるのは私のみであらうか。がん細胞は、増殖の制御が効かなくなつて、いつまでも増殖を続けてしまうのでいろいろな不都合が出てくる。正常細胞は、使命を自覚して任務を確実に果たす、自己制御と犠牲の上で生きている細胞であるが、がん細胞はこの目標を見失つて、増殖することに長けた細胞に変貌しているということである。

【電子計算機時代だ、宇宙時代だといつても、人間の身体のできと、その心情の動きとは、昔も今も変わつ

てはいないのである。超近代的で合理的といわれる人でも、病気になる自分の死を考えさせられる時になると、太古の人間にかえる。その医師に訴え、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。

静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかえるのである。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである【は、吉田富三博士の言葉である。大学の医学部や看護学部や薬学部のような医療に関わる人材育成の現場においても『吉田富三博士没後五十年・生誕百二十年記念事業』の全国展開は時代的到來ではなかるうか！



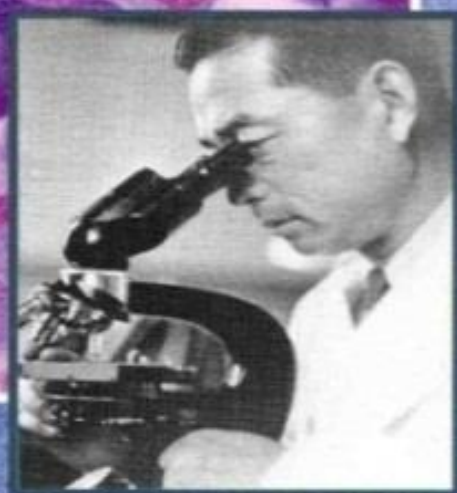
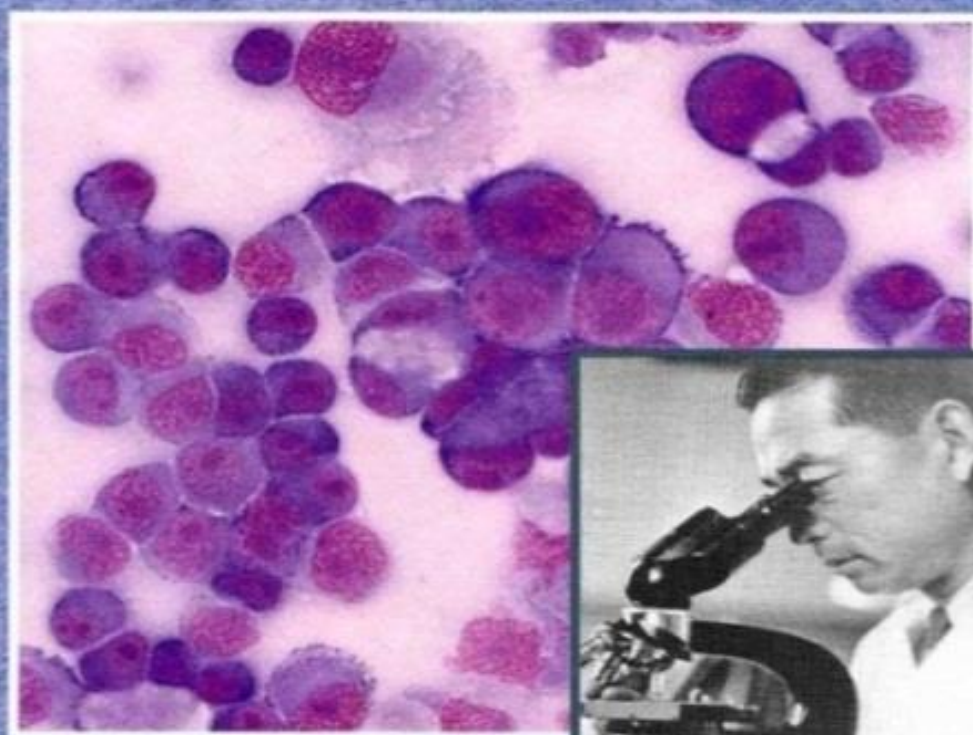
恩師 佐々木隆興先生と



# 日本の科学者 吉田 富三

生誕100年記念

北川 知行・樋野 興夫 編



## 「吉田富三記念 がん哲学外来」モットーの5か条

- 1) 『「嫌」とは、言わない人物』の実践
- 2) 「ほっとけ、気にするな!」の実践
- 3) 「あなたの行かれる所に 私も行きます」の実践
- 4) 『「あれも、これも」でなく「これしかない」』の実践
- 5) 「謙遜と大胆」の実践



がん哲学外来理事長  
樋野 興夫 先生